

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 22日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530142

研究課題名（和文）脅威認識の源泉—安全保障ジレンマの緩和に向けた理論構築

研究課題名（英文）Sources of Threat Perception: Towards Ameliorating Security Dilemma

研究代表者

植木 千可子(川勝千可子) (UEKI CHIKAKO)

早稲田大学・アジア太平洋研究科・教授

研究者番号：50460043

研究成果の概要（和文）：脅威認識の形成要因及び過程を明らかにすることを目指した。その結果、脅威認識の形成には相対的なパワーの増大や、観察する側の国の置かれた相対的な位置に大きく影響されることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The study sought to identify factors and mechanism by which threat perceptions form. The study found increase in relative power and power position of the perceiver strongly influences threat perception.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学、国際関係論

キーワード：国際理論、対外政策論、安全保障論、脅威認識

1. 研究開始当初の背景

国際関係論において、「脅威認識」は主要な概念で、国家の安全保障、同盟選択に大きく関わっていると考えられてきた[Stephen Walt, *Origins of Alliances* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1987)]。しかし、これまで、脅威認識の研究は Robert Jervis, *Perception and Misperception in International Politics* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1976)を始め、誤認（misperception）の解明に焦点が当てられることが多く、脅威認識そのものの源泉を分析する研究は少なかった。歴史的な事例をアネクドト的に検討して、脅威認識の概

念の整理をした研究などが散見される程度である[Klaus Knorr, *Historical Dimensions of National Security Problems* (Lawrence, Kansas: Allen Press, 1976); Raymond Cohen, *Threat Perception in International Crisis* (Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1979)]。1990年代に米国の国際政治学者らが集まり、重要な概念に関するこれまでの研究を総覧したところ、「脅威認識」に関する研究がほとんどなく驚愕したという逸話が脅威認識の研究の少なさをしている。

一般に、脅威は「能力」と「意図」の積によって評価され、脅威認識が形成されると考

えられている [J. D. Singer, "Threat-Perception and the Armament Tension Dilemma" *Journal of Conflict Resolution*, 2, No. 1 (1958)]. それでは、能力と意図が何によって認識（評価）されるのか、という研究はこれまでほとんどない。歴史的に見て、急速に台頭する国に対して脅威感を抱く事例は多い。しかし、国々が反応するのは、相対的な総合国力なのか、核心的な価値を破壊するに足る絶対的な能力なのか、あるいは能力の変化の速度なのか、など明らかになっていない。意図に関しても、特定の言動、イデオロギー、既存の価値観などが脅威認識の形成に関係があるのではないかと考えられているが、それぞれの要素の影響力の多寡、関連などについても研究はない。最近では、民主主義のアイデンティティーと脅威認識の関係などを考察する研究も現れているが、いまだ脅威認識の形成要因に関する研究は少数である [Barbara Farnham, "The Theory of Democratic Peace and Threat Perception" *International Studies Quarterly*, 47 (2003)].

本研究は、国際関係論の理論的な「空白」を埋める試みの一環である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、脅威認識を形成する要因を特定することである。脅威認識に対する理解を深めることによって、国際関係の理解を促進すると同時に、国家間の安定に寄与する提言を行う学問的基礎を作ることを目指した。

具体的な目的としては、

第1には、「脅威認識は何によって形成されるのか？」という設問に答えを出すことである。「脅威」および「脅威認識」は、国際関係論における重要な概念で、「脅威」は国家の行動を規定する重要な要素だと考えられて来た。しかし、これまで、脅威認識に関する研究は少ない。国家および個人がどの要素によって他国（他の主体）を脅威と認識するのかについて解明を目指す。

第2には、日米両国の脅威認識の比較など、いくつかの事例研究を通して、脅威認識を惹起する要因を明らかにしたい。その際、とくに相対的な総合国力、その変化、攻撃能力の保有、特定の言動、などが及ぼす影響について考察する。

3. 研究の方法

日本と米国の対中認識、中国の対日、対米認識などを資料と聞き取り調査によって特定し、そのデータを用いて下記の仮説の検証を実施した。検証方法は事例研究である。

(1) 相対的なパワーの増加によって脅威認

識は形成される

(2) 核心的な価値に損害を与える絶対的な攻撃能力の取得によって脅威認識は形成される

(3) 米国は総合国力の増加に敏感で、日本は攻撃能力の増加に敏感である

(4) 価値観の影響はパワーの増大が伴う場合に限って顕在化する

(5) 戦略的な依存関係の有無が脅威認識の形成に影響する

4. 研究成果

(1) 相対的なパワーの増加による脅威認識の形成

日本、米国、中国の脅威認識について検討した結果、相対的なパワーの増加が脅威認識を形成するという仮説が支持された。ただし、細かい点では相違が認められた。

①米国は総合国力の増加に敏感である

②日本は攻撃能力の増加に敏感である

(2) 絶対的な攻撃能力の取得による脅威認識の形成

脅威認識の形成において相対的なパワーの増大と絶対的なパワー（攻撃能力）の増大のどちらにより敏感に反応するか、を明らかにするために検証を行った。その結果、まず相対的なパワーの増大に対して敏感に反応することが明らかになった。その上で、(1)で見たように日本は米国に比べて攻撃能力の増加に敏感に反応し脅威認識を形成していた。とくに、南西諸島に対する中国の能力の増強に敏感に反応していた。ただし、いずれのケースにおいても絶対的な攻撃能力を取得する前に増加トレンドに反応する傾向が観察された。

(3) 優勢にある国の脅威認識の形成

優勢にある国の脅威認識の形成には、相対的なパワーの増大が大きく影響していた。ここでも増加トレンドに対して敏感で、差が縮まる状況において最も敏感に反応する。覇権国においては、覇権状態が認識されているという条件が満たされた後に、覇権が侵害される状況に対してパワーの多寡に関係なく脅威と認識する傾向が認められた。

(4) 劣勢にある国の脅威認識の形成

劣勢にある国の脅威認識は、パワーの変化によってだけでなく、自国に対する行動や言説に反応して形成されていた。中国の脅威認識の場合、パワーの変化そのものよりも米国、日本の中国に対する行動、言説によって脅威を評価している傾向が認められた。

(5) 戦略的依存関係（戦略的セーフティネット）と脅威認識の形成

日米中の脅威認識の形成には、冷戦の終結が大きな影響を及ぼしていた。冷戦の終結とソ連の崩壊によって起こったパワーの分布

の変化は安全保障上の依存関係を解消し、中国の対米、対日脅威認識に変化をもたらした。とくに日米の脅威認識の形成にその影響が大きかった。米国は冷戦後、日本、ドイツという同盟国、及び中国という半同盟国に対して潜在的な競争相手、潜在的な脅威として認識した。戦略的依存関係の解消によって認識が変化したと考えられる。

中国の脅威認識についても、冷戦終結とソ連の崩壊が大きな影響を与えたと示唆された。しかし、中国の場合は、ソ連の脅威の減少が1984年ごろから認識されており、それに伴って対米、対日認識に変化が生じたことが認められた。

(6) 本研究成果の含意・意義

脅威認識の形成過程、形成要因に関する本研究の研究成果は、対外政策、安全保障政策策定の基礎を提示するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① Chikako Kawakatsu Ueki, “Prospects for Regional Security Cooperation in East Asia,” アジア太平洋討究、査読有、16巻、2011、45-58
- ② 植木(川勝)千可子、「世界の構造変動と日米中関係」、国際問題、586巻、2009、15-28

[学会発表] (計13件)

- ① Chikako Kawakatsu Ueki, “Japan’s Perception of China’s Rise,” Assessing Recent Changes in Japan’s International Crisis Management Capabilities, 2011年10月28日、Duisburg、ドイツ
- ② Chikako Kawakatsu Ueki, “Competing Grand Strategies for Japan,” International Conference: Contemporary Japan, 2011年10月25日、ベニス、イタリア
- ③ Chikako Kawakatsu Ueki, “The Japan-U.S. Alliance and Regional Security,” 変容するアジアと日米関係、2011年6月9日、東京
- ④ Chikako Kawakatsu Ueki, “Japan at a Crossroad: Future Prospects for Japan’s Security Policy,” 21世紀日本の対外関係と国内システム、2011年1月28日、東京
- ⑤ Chikako Kawakatsu Ueki, “The U.S.-Japan Alliance at Fifty: A Realist Perspective,” 日本国際政治学会、2010年10月30日、札幌
- ⑥ Chikako Kawakatsu Ueki, “The

U.S.-Japan Alliance at Fifty: Achievements and Challenges,” UCSD Center for Pacific Economies, 2010年6月1日、サンディエゴ、米国

- ⑦ Chikako Kawakatsu Ueki, “The U.S.-Japan Alliance at Fifty,” Symposium on the 50th Anniversary of the U.S.-Japan Alliance, 2011年5月28日、東京
- ⑧ Chikako Kawakatsu Ueki, “Japan’s China Policy and the U.S.-Japan Alliance,” Japanese Studies Association in Southeast Asia, 2009年10月23日、ハノイ、ベトナム
- ⑨ Chikako Kawakatsu Ueki, “The Rise of China: Regional and Global Implications,” 米中二極体制と日欧の対応、2009年10月17日、東京
- ⑩ Chikako Kawakatsu Ueki, “The U.S.-Japan Alliance and China,” the Rise of China and Japanese Responses, 2009年10月16日、東京
- ⑪ Chikako Kawakatsu Ueki, “Prospects for Cooperation Under Anarchy,” U.S.-Japan-ROK-China Security Interests and Identity in the 21st Century, 2009年5月、上海、中国
- ⑫ Chikako Kawakatsu Ueki, “2008 and After: Implications for Regional Security,” 早稲田大学日米研究機構シンポジウム、2008年6月26日、東京
- ⑬ Chikako Kawakatsu Ueki, “Elephant and Dragon,” Common Values in Asian Architecture, 2008年4月、ホノルル、米国

[図書] (計7件)

- ① 植木(川勝)千可子、東洋経済新報社、変容するアジアと日米関係、2012年、223(113-132)
- ② 植木(川勝)千可子、勁草書房、グローバル化とアジア地域統合、2012年、342(257-286)
- ③ Chikako Kawakatsu Ueki, Palgrave Macmillan, The U.S.-Japan Alliance: Regional Multilateralism, 2012年、314(137-155)
- ④ 植木(川勝)千可子、かもがわ出版、脱・同盟時代、2011年、156(121-151)
- ⑤ 植木(川勝)千可子、日本国際問題研究所、アメリカ政治を支えるもの、2010年、355(319-346)
- ⑥ 植木(川勝)千可子、弘文堂、アジア学のすすめ、2010年、308(147-169)
- ⑦ 植木(川勝)千可子、かもがわ出版、抑止力を問う、2010年、222(81-119)

[その他]

- ① 植木 千可子、朝日新聞、米中「G2」で世界は回るか、世界衆論、2009年5月15日、朝刊、17
- ② 植木 千可子、NHK総合テレビ、「これからの、日本」、2010年3月12日
- ③ 植木 千可子、BSフジ、プライム・ニュース、2010年5月28日
- ④ 植木 千可子、参議院国際・地球温暖化に関する調査会報告、日中関係と地域安全保障、2010年4月14日
- ⑤ 植木（川勝）千可子、防衛力と安全保障に関する懇談会委員（首相の私的諮問機関）、防衛力と安全保障に関する懇談会報告書、2009年
- ⑥ ホームページ：
<http://www.waseda.jp/gsaps/faculty/ueki/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

植木 千可子 (UEKI CHIKAKO)
早稲田大学・大学院アジア太平洋研究科・教授
研究者番号：50460043